

● 令和3年度 労働災害防止論文 金賞 ●

「労災の起きにくい環境づくり」

中央ビルメンテナンス株式会社 安 部 拓 見

3年前まで、私は作業スタッフとして現場で働いていました。当初は時間がかかっていた作業にも少しずつ慣れ、初めて上司から褒められ新たな仕事を任された時は、とても嬉しかったのを覚えています。そして、周囲の期待に応えなかった私はある日、時間内に何とか業務を終えるべく急ピッチで作業を進め、不注意から大型台車との衝突、あわや労災事故を起こしかけてしまったのです。

現在は現場を離れ、管理部門の労務事務員として労災事故の集計や手続を担当しています。業務を通じ、3年前の当時いかに自らの行動が浅はかで、重篤事故につながりかねないものだったかを改めて知り、恥じる思いです。その気持ちを忘れず、労災を減らすにはどうすべきか考えながら、業務に取り組んでいます。

数多くの労災事例とその顛末を知る中で、現場にいた頃には知りえなかったデータや状況が見えてきました。特に私が注目したのは、労災発生原因の大半が「不注意」によるものだということです。ビルメン業界では同じ作業の繰り返しが多いことから、経験と共にスタッフの手際は徐々に洗練、効率化されていきます。しかし、それは同時に慣れや油断が生じやすくなるということでもあり、これがいわゆる「不注意」に繋がる大きな要因だと考えられます。もちろん、常日頃から気を付けて作業するようスタッフへの注意喚起は欠かせませんが、人の手で行う作業が中心である以上、この「不注意」を完全に無くすのは現実的になかなか難しいように思えます。

そこで、別のアプローチから労災防止を考えます。不注意から発生した労災事故について、その不注意に至る理由や背景がどこかに潜んでいないか検証すること、ひいては「環境そのものを労災が起きにくいものに改善する」取り組みが有効ではないでしょうか。現場での作業経験と労災事故のデータ集計結果から、私が考える施策を以下に提言します。

まず、事故の発生原因をしっかりと明確にする

ことです。「不注意」が原因だとした場合、「疲れて集中力が散漫になっていた」のかも知れませんが、「急いでいて丁寧に作業できなかった」のかも知れません。「多少の注意はしていたが、本人ではどうしてもなく起こるべくして起こった」可能性もあります。当たり前のことですが、再発防止策の検討には一歩踏み込んだ原因の究明が不可欠です。

次に、環境や仕組みに不備がないか検証します。具体的には「業務量に対する作業時間や人工数、人員配置が適切であったか」、「事故が起こりうる危険個所を把握できていたか」、「作業手順やマニュアルがあり、その手順は適正か」等が考えられます。これらを正確に把握するためには、日頃から何でも忌憚なく言い合えるスタッフとの信頼関係、縦と横の繋がりの構築も当然必要となるでしょう。

そして、これらを踏まえ事実関係を確実に記録し、見えてきた課題から再発防止策を講じます。事故1件1件を省みたデータの積み重ねから分かることもあり、そこから新たな施策のヒントが得られる可能性もあります。また、事故発生から再発防止策までの一連の流れはスタッフへ情報共有し、「他人事ではなく、我が身に起こりうること」として聞いてもらうことで、注意喚起の意味合いが更に増すものと思います。

令和2年度、当社は残念ながら過去5年間で最も多い労災発生件数を記録してしまいました。奇しくも、コロナ禍による心身の疲れが大きかった1年です。私は、これも隠れた事故発生原因のひとつとしてあった気がしてなりません。上記施策は労災防止だけでなく、コロナ禍の今だからこそ殊更求められる「働きやすい職場の環境づくり」という観点からも効果があると考えます。

今年は1件でも多くの労災事故を防止し、現場のスタッフが辛い思いをしないで済むよう、注意喚起を行って参ります。

● 令和3年度 労働災害防止論文 銀賞 ●

「ヒヤリハットからの気付きと事故防止」

北海道クリーン・システム株式会社 斎 藤 春 菜

私はJRタワーの中で、『Tコメット』としてお客様へのご案内と館内の清掃業務を行っています。お困りのお客様を見つけた際は、他のお客様にぶつからないように気を付けながら近寄り、声を掛けてご案内をしています。

館内を巡回していると、お客様が突然立ち止まったり、方向転換をしたり、またはお店から周囲を確認せずに出てきたりと、危険なことが多く起こるため、周囲をよく見て緊張感を持ちながら巡回を行っています。なので、新人研修では、巡回中に起こり得るヒヤリハットに触れながら業務を教わります。

例えば、館内のガラス扉を拭く際は、周囲にお客様がいないかを確認してから、両手で扉を引いて開けます。ガラスを拭く際は、90度まで扉を開け足先をドアストッパーにし、扉を押さえながら拭きます。また、閉める際は、周囲の状況を確認してから、最後まで両手で閉めます。この基本動作は、1か月の研修期間にすり込まれているため、ガラス扉でのヒヤリハットは全くと言っても良い程、経験した事はありませんでした。

しかし、この当たり前になっていた動作で「事故なんて起こさない」「大丈夫だろう」と過信したために、事故になり兼ねないヒヤリハットが起きました。

その日は、普段通りにガラス扉を拭き終え、閉めるために、前後からお客様が来ていないか確認し閉め始めたところに、前方からお客様が来ていることに気が付き、慌てて扉を開けました。もし、気が付かず、開いた扉から手を離していたら、危うくお客様を扉に挟めてしまっていたと思うと、ヒヤッとしました。

私は、この事から何故、周囲を確認したのに関わらず、このようなヒヤリハットが起きたのかを考えました。一番の原因は「注意不足」です。私が拭いていたガラス扉には、営業時間が書かれた白い大きなラミネートが貼られていました。前方を確認したタイミングでお客様の

姿がラミネートと重なり、見えなくなっていたのです。『奥にいるかもしれない』という発想に至らず、前方を確認したつもりでいただけで、きちんと確認していませんでした。

このことで、周囲を確認した後も「もしかしたら」と考えて行動しなければいけないと痛感しました。

このヒヤリハットを体験してから、ラミネートで見えにくい部分は目視でききちんと確認できるように、扉から少し顔を出して確認するようにしています。また、同僚にもこの事柄を伝え、注意してもらうことにしました。後方確認をする際も、ただ後ろを見るのではなく、「思わぬところからお客様がくるかもしれない」という気持ちで、更に周辺を見渡してから、開閉の動作を行っています。

現在は、多くの場所で新型コロナウイルスの感染対策として設置されている「消毒液」ですが、液体のため床に零されることも多く、床が滑りやすい状態になっていたり、設置台がスタンドタイプでコンパクトな分、倒れやすかったりと、新たに気を付けなければならない事が増えました。このような状況の変化に対応していくためにも、小さな変化も見逃さず、疑問に感じたことは、職場で共有し事故防止に努めています。

また、各々が体験したヒヤリハットを詰所に掲示することで、自身では経験した事がないヒヤリハットを知ることが出来、その場所や場面では注意し対応するようにしています。

最後に、日常的に起こるヒヤリハットが本当の事故にならないよう、普段行っている確認作業や動作の意味を改めて考え、これからも「もしかしたら」という気持ちを忘れずに行動します。また、自らの安全と施設をご利用頂くお客様の安全を守り、気持ちよくJRタワーをご利用できるように、事故防止とともに快適な空間づくりに努めます。

● 令和3年度 労働災害防止論文 銅賞 ●

「一声の大切さ」

北海道クリーン・システム株式会社 若原 智 美

私は現在入社して7年目、札幌駅直結の大型商業施設で清掃をしています。清掃といっても商業施設なので、お客様と接する機会が多いことから、日々、お客様に対して怪我や事故の無いように注意しながら、仕事をしています。しかし、今から約5年前、仕事が終了し後片付けをしている途中で、私自身大怪我をしてしまいました。

概要は、液体石鹼の入った一斗缶を、固定されていない枠の中へ入れようとしていたのですが、上手く入らずに困っていた方がいた為、お手伝いをしようと思い、その枠の下方を指で押さえました。しかし、その方から手を離す指示が無く、突然一斗缶が離され、私の指の上に落ちて来ました。咄嗟に指を枠から引きましたが遅く、指から出血し、更に指が切断しかけていました。幸い施設内に病院があり、そこですぐに手当てを受けることができたので、今現在指は完治していますが、もしも近くに病院が無い場所で働いていた場合、私の未来は少し変わっていたかもしれません。

毎朝、作業前の朝礼で、上司から事故や怪我の無いように言われていましたが、業務終了後の出来事でしたので、自分でも予測出来ずに不注意だったと反省しています。

事故時、お互いにいつ手を離すか声を掛け合っていれば、このような事にはならなかったかもしれません。また、仕事が終了しても「いつ」「どこで」「誰にでも」危険な事はあるという体験をしました。どのような時でも「声を掛け合う」という事が、事故や怪我を防ぎ、職場の安

全に最も重要な事であると学びました。「声を掛け合う」とは、事故や怪我を防ぐだけではなく、お互いを思いやる気持ちが生まれ、良い職場環境作りにも繋がるのではないのでしょうか。

仕事をする上で大切な事は、自分にとってやりがいのある仕事ですが、それにはやはり良い職場環境、つまり人間関係だと思います。人間は気持ちを「言葉」で表す事が出来る生き物です。会話も無く殺伐とした環境の中では、どの仕事も楽しくなく、やりがいを感じず、安全作業に目を向ける事も出来ないのではないのでしょうか。私達は「家族」には声をかけます。それと同様、職場の仲間にも「声を掛ける」事が、重要なコミュニケーションだと思います。他人同士の集まりだからこそ「意識」し、「声を掛ける」事が必要です。

事故が無く明るい職場作りには、一人一人の意識が重要です。誰かが「声掛けをする」のではなく、自分から積極的に「声掛けをする」意識を持つと、周りもきっと自然と「声掛け」をするようになるのではないかと考えます。

また、職場の同僚だけではなく、同職場で働くショップスタッフの方にも、「おはようございます」や「お疲れ様です」等の声掛けをする事でコミュニケーションが取れ、施設全体の輪が強まるのではないのでしょうか。

私は、過去の自分の体験で学んだ事を生かし、これから積極的に一声掛ける「大切さ」を伝えていき、安全作業と明るい職場作りに取り組んでいきたいです。

● 令和3年度 労働災害防止論文 佳作 ●

「コロナ禍での労災防止を考える」

中央ビルメンテナンス株式会社 鎌 田 敬 之

目下、世界中を苦しめている新型コロナウイルスにより、我々の生活は一変した。マスクは当たり前のように着用し、手指消毒のためのアルコールもいたるところに設置された。事務所には、体温測定を自動で行ってくれる検知器が設置され、毎朝、「正常な体温です」の機械音声を聞く異質な日々にもすっかり慣れた。

このように、我々の取り巻く作業環境はコロナ禍により、大きく変容したが、労災との関連性も注目すべきところである。特に、この猛暑のさなか、マスクをした状態での作業は現場スタッフにとって大きな負荷がかかるし、ただでさえ様々なことに気を遣う必要のある現場、配慮すべき事項が一つ増えただけでも大変なもので、コロナ対策を抱えながらの現場管理には、これまで以上に、管理者の意識付けが重要になってくる。コロナ禍での暮らしには、一定程度「慣れた」かもしれないが、労災とはあらゆる現場のあらゆる場所に発生する可能性があり、決して、その作業状況に慣れてしまっただけではより危険性が高まるものである。その、コロナ禍での労災対策として、私が提言したいことは3つある。

1つは、「基本を忠実に守り、作業を行う」ことである。コロナ禍ではこれまで気にならなかったことも気になってしまうことがどうしても増えるなか、できる限り、平常心を保ち、作業に当たることが肝要である。

2つめは、その平常心を保つために、なにより新型コロナウイルスに関する情報について、根拠のないものに振り回されず、行政や、協会等が発信する確かなエビデンスのある情報を取り入れ、社員に周知するとともに、管理者自らがその啓発に努力することである。現場で働く社員を安心させることが目的である。

3つめは、コロナ禍を機に、今まで見えなかつ

たものが見えてくるということである。労災防止の観点におけるあらたな視点をもてないか、ということである。コロナ禍は、人類全体に行動変容を迫るようなものであり、ピンチはチャンスと簡単に言える状況ではないものの、コロナ禍に対応するなか、労災を防ぐ新たな視点とは何かを常に模索する管理者の姿勢が、建設的な労災防止策とコロナ対策の捉え方ではないだろうか。コロナ対策をしているなかで、労災防止にも繋がった、という事案が一番、理想的である。

その視点で考えると、キーワードはITではないだろうか。コロナ禍は、日本全体のIT推進にも拍車をかけている。ITを活用した安全管理で労働災害を防ぐ。例えば、建設現場の高所作業では「転落・墜落」、製造業の工場では重機への「挟まれ、巻き込まれ」などの労災が考えられるが、スマートフォンやセンサーなどのIoT技術を活用することで、作業者の位置や危険な重機との接近などを検知でき、現場管理者へ素早く状況を伝える作業員安全支援システムが、すでに実現されているところもあると聞く。ビルメンテナンス業界においても、作業員の安全確保のために、デジタル技術を取り入れていくことが、労災防止に対する、将来を見据えた取り組みになるのではないだろうか。最近では、IT化とは異なる、DX（デジタルトランスフォーメーション）といった概念が一般的になってきており、ますます、デジタル技術の活用は重要性を増している。

私は、100年に一度と言われる、未曾有のコロナ禍というパンデミックを、ビルメンテナンス業の在り方を考える好機と捉えることが、重要なことと考えている。今後もビルメンテナンス業の発展に、会社を通して尽くしていきたい。

● 令和3年度 労働災害防止標語 入賞者 ●

金賞

誰かより 気づいたあなたが まず確認

中央ビルメンテナンス(株)

金 田 美 技

銀賞

危険の芽 皆で摘み取る 報・連・相

(株)キタデン

石 黒 隆一郎

人のヒヤリは、自分のヒヤリ みんなで共有 安全作業

北海道クリーン・システム(株)

柳 川 彩

銅賞

あいさつで 気持ちの交流 広がる笑顔

北菱産業埠頭(株)ビル管理部

野 口 理 恵

焦らず 無理せず 油断せず みんなで取り組むゼロ災害

北海道クリーン・システム(株)

松 本 恵 美

あわてず あせらず 手を抜かず ルールを守って安全作業

日本クリーン北海道(株)

酒 井 和 子

大きな事故の小さな予兆 初心にもどって安全確認

ホクビサービス(株)

米 田 安 菜

危険の芽 見る目 気づく目 予知する目

日本クリーン北海道(株)

伊 原 優一郎

佳作

朝の挨拶 輝く笑顔“絆”深まる無事故の誓い	協和総合管理(株)	高 橋 俊 雄
焦らず 慌てず 深呼吸 心のゆとりで	ゼロ災害 (株)クリーン開発	工 藤 香 織
危ないぞ！安全管理の 合言葉	(株)ベルックス	工 藤 幸 喜
慌てるな 急ぐ心に ブレーキを	協和総合管理(株)	宮 下 雅 美
安全に ショートカットはありません 一步一步 確実に	(株)ベルックス	笠 羽 通 聡
安全は ひとつひとつの積み重ね みんなで築け	ゼロ災職場 ホクビサービス(株)	獅子原 亮 二
いつもと違う違和感に アンテナめぐらせ 危険予知	ダイビ(株)	池 本 由美子
変わる時代に 変わらぬ基本 初心に戻って 安全作業	日本クリーン北海道(株)	関 原 真菜美
災害は 小さなヒヤリの積み重ね	中央ビルメンテナンス(株)	佐々木 朝 美
シェアしよう あなたのやってる 安全確認	日本クリーン北海道(株)	岡 崎 廉
知らせよう！！俺のヒヤリはみんなのヒヤリ なくして目指そう	無災害 ホクビサービス(株)	小 松 一 男
慣れた作業も油断せず 気持ち引き締め安全確認	(株)キタデン	近 藤 淳 一